

職人探訪

注染そめ工房 〈二橋染工場〉

中心市街地にほど近い中区常盤町。住宅や商業ビルと肩を寄せ合うように佇む、昭和2年創業の二橋染工場は、繊維のまち・浜松の情景を今に伝える数少ない染色工場のひとつである。



二橋染工場・代表取締役 二橋教正さん
22歳から染色業界一筋に生きる、二橋染工場三代目。浜松織物染色加工協同組合の理事長も務める。

工場の2階に備えられた干し場。生地糸へのダメージを最小限に抑えるには、自然の風による乾燥が一番なのだとか



注染そめの伝統と未来を牽引

今、再び注目を浴びる

熟練の染色

粘着性の高い糊は、粘土や海藻を配合して作られたオリジナルのもの。
熟練の職人が生地に均等に塗り付けていく



この道30年以上、三代目の二橋教正社長の案内で、早速「浜松注染そめ」の現場へ。糊と染料が醸し出す独特の香りに包まれる中、15名の職人たちが、板場（生地を折り返し、糊付けをする作業）・紺屋（注ぎ染めの作業）といった各工程を黙々と、かつ流れるように行っている。ここでは主に、てぬぐいやゆかたに使用される生地を1日120反ほど染め上げているそうだ。「注ぎ染めに目がいきがちですが、一番大切なのは実は板場の工程。『板場さえ失敗しなければ大丈夫』と言われるくらいい

です。生地を折り返して糊付けするというシンプルな作業ですが、これにはかなりの熟練が必要で、染め上がりや生地のシワにも影響します。すべて手作業で行っているため、その日の気候や湿度、生地の特性を見極めることも欠かせません。連続テレビ小説『と姉ちゃん』でも登場し、再び注目を浴びている浜松の染色技術。「ゆかたの需要が増えていることもあり、今後ますます浜松注染そめの価値は高まっていくと思います。こういった染色技法は世界に誇れるものですが、浜松注染そめならではのほかしによる風合い、馴染むような肌触りなど、ぜひ一度手にとって、一般的なプリント染めとの違いを感じてほしいですね」と二橋社長は語る。

二橋社長は語る。

二橋染工場では浜松注染そめをより多くの人に知ってもらうため、工場見学会や地元教育機関、全国各地での出張実演にも力を注いでいる。出掛けた先でてぬぐいやゆかたに触れる機会があつたなら、まずはその生地が表裏同じように染められているかチェックしてみてもいい。そして「浜松注染そめ」であるかを確認してみてもいい。

【株式会社 二橋染工場】
浜松市中区常盤町138-14 ☎053-452-2686
<http://www.nihashi-tinta.co.jp/>

糊で防染された生地に「やかん」で染料を注いで、模様を染め上げていく。両手のやかんはそれぞれ違う染料。それを同時に注ぎ入れていくのはまさに職人技



静岡県郷土工芸品に指定される「浜松注染そめ」。現在、その技術を受け継ぐ工場は市内で6カ所となっている